

1986年出土の木簡



(京都西南部)

京都・長岡京跡(3)

1 所在地 京都市伏見区菱川町

2 調査期間 一九八六年(昭61)二月～一九八七年三月

3 発掘機関 勘定京都埋蔵文化財研究所

4 調査担当者 長宗繁一・鈴木広司

5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

長岡京跡は、現在の行政区分では向日市・長岡京市・大山崎町・

京都市の三市一町にまたがっている。当報告は京都市域における調

査で、京都市外環状線道路

整備事業に伴い、昭和五五

年度より実施している一連

の発掘調査の一つで、本年

度分はV区と称している。

調査地は、向日市との境
に近い標高約一四mの水田
地帯に位置する。V区では
平安時代後期の墓跡、長岡

京の推定東二坊大路路面とその東西両側溝を検出した。なお東西両側溝の溝心々の距離は約二四mであった。また、大路西側において、建物跡・井戸・沼状の遺構を検出し、その下層から、奈良時代の条里・水田跡などを検出している。

8 木簡の記文・内容

木簡は五点で、すべて長岡京期の遺構から出土した。(1)(2)(3)は沼状遺構、(4)は柱穴、(5)は東二坊大路西側溝からの出土である。

(1) 「△地子米五斗」

(2) 「△地子米川□×

(3) 「□□□黒米。(穿孔)
〔良〕(穿孔)五斗」

(4) 「△進上 □ □□×
〔謹解カ〕」

(5) 「△ □□□十口」

92×21×2 033

(70)×17×5 039

131×21×2 051

(140)×(20)×7 061

(120)×26×7 039

れでいる。これまで地子と表記された木簡は、向日市教育委員会の長岡京左京一三次、同二二一一一二次、同五一次の太政官厨家推定地(左京一條一坊)のSD1-III-1から1-III点、同地域での立合調査八〇一八次のSD五-10-1から1-III点が出土している。長岡京以外では、平城宮第三五次調査のSK四四五三から「乗田価錢」の木簡が

出土していて、天平年間のものと推定されている。本調査地出土の地子米木簡は、品目・量のみの簡単なものとなつておらず、国・郡・郷名、貢進者名、検収署名、日付などを省略する点で、SD一三〇一出土の地子米木簡と異なる。(3)は(1)(2)と同様の性格をもつと考えられる。上の三字の意味が不明である。黒米は仕丁等の常食に充てられるもので玄米である。地子米は白米で、官人等の常食に充てられている。本調査地に上、下両身分を擁し、太政官と関わりのある、地子米を移送させる力を持つた人物、或は施設の存在も考えられよう。(4)は曲物の底板に書かれており上半を欠く。文章の体裁をなさず、習書と思われる。

当調査地付近には「川原寺」の存在が推定されてきた。これまでの調査では、その位置を知る手掛りさえつかめていなかつた。しかし前年度のT区の調査以来、わざかながら解明の糸口がつかめてきた。T区では厨房を思わせる遺構群及び漆紙文書片、三三片におよぶ墨書き器、多量の転用硯の出土をみている。今回出土の木簡と考え合わせると、共に多人数の給食を必要とする施設、常に文書が行きかっていた場所であることから、「川原寺」の一部を検出した可能性があると考えている。とは言え、当調査地付近の発掘調査はごくわずかであり、今後の調査例の増加を待ちたい。

9 関係文献

向日市教育委員会『長岡京木簡一』(一九八四年)

(鈴木広司)

